剣道の思い出

中学生の時、剣道部に所属していた。どこかの運動部に所属するのが当然のような雰囲気で、時代劇や忍者映画が好きだったこともあって剣道部にした。ところが、剣道に必要な優れた反射神経や敏しょう性といった能力がまったくないうえに、人より身体が大きくて打突される部分が広いせいもあって負けてばかりだった。夏になると、防具や剣道着が汗臭くて、カビさえ生えるような劣悪な状態になり、しかもエアコンなどない環境で練習をせねばならず大変だった。

そんな私を横目に、運動部の主将に選ばれる人たちは、当時はやっていた「巨人の星」とか「柔道一直線」、少女漫画では「サインはV」や「アタックNO・1」といったスポーツ根性漫画の主人公のように格好良く、その上学業も優秀ないわゆる「文武両道」を地で行く人が多く、うらやましかった。

高校に進学してからも剣道部に入り、なんとか初段認定試験には合格したものの、インターハイに出場するほどの強豪校だったので強い部員が多く、補欠どころか用具運びくらいしかやらせてもらえなかった。

米国で育った娘たちはフェンシングをやっていたのだが、私の若いころとよく似ていて、娘たちが試合で勝ったのをあまり見た記憶がない。私のDNAを受け継いだ娘たちに申し訳ないと思うと同時に、親子の証しを強く感じられる瞬間だった。

（令和元年十一月二十七日　中日新聞・東京新聞掲載）